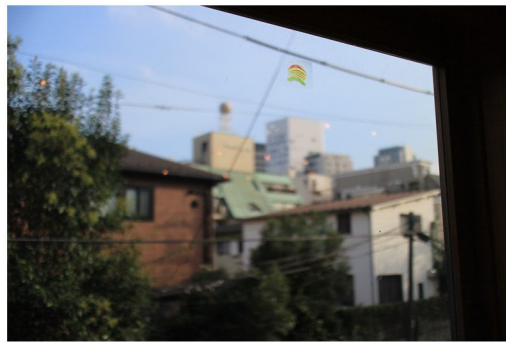
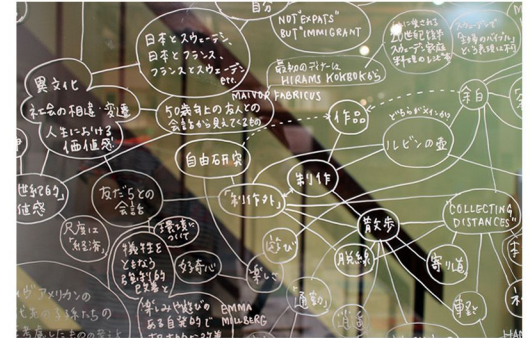




ルビンの壺(反転可能な像の視覚的解釈を提示する錯視図形のひとつ)をキーワードとし、境界を共有する二つの互いに補い合う領域という概念を自身の制作に当てはめ、生活(日常)と仕事、過程と結果といった「図」と「地」の認知について取り組み、非-制作と定義してきた好奇心あふれる創造的過程について再考した。

前作であるアーティストブック『Collecting Distances』では自身と社会との距離を測り、日常生活の中でどのように制作の考えが醸成されるかという過程を提示したが、そこでの制作活動の余白や脚注に思いを巡らせる中からこの作品が生まれた。

インスタレーションは、他のものとの関係性の中で存在する要素の集まりで構成され、さまざまな逍遙の探求と、遠くにあつて対話を続ける人々との関係性を辿る。また、展示室と定義されていない空間を利用することで、概念上だけでなく物理的にも主題に挑戦している。



自由研究とルビンの壺
2016
インスタレーション
東京・渋谷 ヌトレヒトにて

